兵庫県生物学会創立40周年記念出版

竹と共に七十年
室井綽博士物語

昭和22年の夏のはじめ、廃墟のに少しずつ青い芽吹を感じるころ明石の地で兵庫県生物学会が誕生しました。以来、自然に親しみ、学問を愛しつづけて40年、教育界をはじめ地域社会へのひろがりにつとめてまいりました。その核としての役割に徹してこられた室井博士のすべてを綴りました、わが生物学会40年の歩みを語るにふさわしい記念出版となりました。博士ご自身の生物抄もたのしみながらためになる記録です。博士の見識、学識、人柄に接した方々の手記も読みごたえがあります。このダイナミックな学匠のドラマをあなたにおすすめいたします。多くの方々におひろめいただければ幸いです。

昭和61年　初夏
兵庫県生物学会創立40周記念出版委員会

なお、編集の手違いにより落丁したため、前田米太郎、三木順一の両氏の原稿を本誌に掲載させていただきました。深くおわび申しあげます。

◇頒布価格　　3,000円

◇お申込みは…郵便振替 神戸5－45682　当津　隆

室井先生と
セイタカアキノキリンソウ

三　木　順　一

室井先生には昭和20年代から、植物に関しては、今もいろいろとお教えを戴いています。逸話や業績については、私よりも親しい方々から御発表があると、存じますので、私からは先生の「セイタカアキノキリンソウと喘息との関係について」（姫路学院女子短期大学、紀要、第2号、1975）、と云う論文に少々ご協力致しましたので、思い出を述べてみたいと存じます。昭和40年代はこの草が日本の都市周辺に最も広がった頃だと思います。県立尼崎病院の肩書きのある医師が、軽率な発表を神戸新聞に、得意げにしたばかりに、それから10年日本国中が、この草を害草として大騒ぎすることになりました。

本家のアメリカでさえ、ブタクサは大騒ぎしても、この草は或る州の州花になりこそすれ、全く問題にしていないことは、文献にも出ています。アレルギーの学会でも、花粉学会でも、論争はしても、結局この草による患者の発生が報告されない限り、無害の草だったのです。今日の日まで、まだ日本では患者の報告は出ていません。私は無害の草であることを、2回ばかり当時大新聞に投書しましたが、無名の1田舎医の投書は没にされてしまいました。そしてマスコミはこの草の伐採に、協力のキャンペインを続けました。自治体の中にも多額の予算を浪費した所もあった筈です。

室井先生は植物学者の立場から、そして医学関係は私の持っている花粉病の文献から、この完璧な論文を書いて戴きました。先生と私は約10年、この草のことで、マスコミと戦いました。20年間にアレルギー学は進歩して、今は放射性ヨードを用いて、免疫の度を数字で表すことが出来るようになり、全く問題にならないことになっています。

それよりも近年スギ花粉によるアレルギー性鼻炎が激増して、益々セイタカアキノキリンソウは騒がれることがなくなりました。

室　井　先　生　と　私

前　田　米太郎

はじめて室井先生のお名前をお聞きしたのは昭和22年頃のことだったと思う。その頃、私は白川の植物化石に熱中していた。ひまをみては白川へ行ったが、名前のわからないものが多かった。室井先生という植物の権威がいらっしゃると聞いて兵庫高校におたずねし、白川の化石に関する文献を見せて載きたいと恐る恐るお願いしたところ、「再び手に入れることができない文献だから家にきてみて下さい」といって下さった。そこで筆記用具をもってお宅へお伺いし写させて戴いた。今なら複写機で簡単にコピーできるのに、当時は自分で書き写すより方法がなかったので、二度お伺いして写させて戴いた。お部屋に簀戸やすだれがかかっていた頃だったから多分夏であったのだろう。そのときの写しは茶色に変色し端がぼろぼろになってはいるが、化石に夢中になっていた頃の記念に今も大切に持っている。

その後先生にご紹介戴いた三木茂先生にもお教え戴くようになったが、最初三木先生に「化石を持って参りますから見て戴けませんでしょうか」というお便りをさし

上げたところ、私の勤めていた飛松中学校へ来て下さることになった。先生はご存じのようにメタセコイアの命名者で、世界的に高名な方であったから、そのお返事を戴いたとき、私のような無名の教師のところへ来て下さるなんて夢ではないかと思った。その日先生を東須磨の駅にお迎えしたときの感激は今も忘れることができない。

三木先生のお教えを戴く機会をつくって下さったのも室井先生のおかげと深く感謝している。

数年前に室井、岡村両先生を中心にして共著で「図解植物観察事典」と「図解動物観察事典」を出版したときそのメンバーに加えて戴いた。この本は25年前に出版された両先生の観察事典の増補改訂版であるが、先生が旧版に書いておられることは、実際に観察しないと気付かないことばかりで、どの本にも書かれていないことが多い。旧版の記事がほんとにそうなのかと、その植物を観察して確かめたことが何回かあった。そしてなるほどその通りだと思い、見慣れている植物でも見すごしていることの多いのに驚いた。文章を書きながら先生に、ここのところに気を付けて観察しないとだめだと御指導を受けているような気持であった。先生の生物を観察される眼は、私とは違う眼であるし、また話を聞きておられるとき耳新しいことは必ずメモにとっておかれ、なっとくのいかないことは何度でも尋ねて確かめられる。これらの知識が先生の智恵袋にためられ、そこでブレンドされたものがお書きになる本に生きてくるのであろう。本を一緒に書かせて戴いたことで、生物についてのより多くの知識を先生から得たこと、生きもののみ方を教わったことを、本の完成と同じくらい嬉しく思っている。

（県立長田高校）